

書 評
REVIEWS



Tanya AGATHOCLEOUS,
*Urban Realism and the Cosmopolitan Imagination
in the Nineteenth Century: Visible City, Invisible World*
(Cambridge Studies in Nineteenth-Century
Literature and Culture)
(xxii+294 頁, 2011 年; Cambridge: Cambridge
University Press, 2013 年, 本体価格¥3,282)
ISBN: 9781107663695

(評) 中越亜理紗
Arisa NAKAGOE

一般的に、世界の一体化が本格化したのは大航海時代以降だと言われている。交通や通信が発達し、近代世界システムが形成され、確立していき、さらに発展しているこの過程をグローバル化と呼ぶのだ。現代においてもこのグローバル化の波は、情報化によりますます加速し、とどまる事を知らない。そこで、グローバル化には貿易の発展や異文化交流などのメリットがあるのだが、その一方でテロリズムや社会問題の世界化などというデメリットもある。

この世界の一体化というトピックは、今回機会を得て読んだ、イギリス文学におけるコスモポリタニズムを題材とする本書に通じるものがある。本書の全体的な内容を紹介しよう。世界覇権を握り圧倒的地位を築き上げた近代のイギリス、そして人口が増加し在住者の多様性も豊かとなった 19 世紀のロンドン。これらの状況に呼応するように、19 世紀半ばから世紀末までの英文学における都市の描写に関する、著者タニア・アガソクレウス氏による研究書である。本書では、ワーズワース、ディケンズ、ウィリアム・モリス、ヘンリー・ジェームズ、ドイル、コンラッドなどなど、あらゆる作家たち、そして多岐のジャンルに渡る作品が扱われている。コスモポリタン・リアリズムという文学的技法を用い、都市から世界を鑑みるという事である。異なるテキストであっても、実は共通の歴史的概念から派生しているのだと説明し、著者はコスモポリタニズムの新たな意義や影響を提示する。ただ、以下に綴るレビューは本書の内容を十分にカバーすることは出来ておらず、あくまでも部分的な紹介になっているという事をここに

断っておこうと思う。

そもそもコスモポリタニズムとは、語源的にはギリシア語の *kosmos* (宇宙、世界) と *polites* (市民) との合成語で、人類全体をひとつの世界の市民をみなす立場のことだ。このような考え方は古代ギリシアに見られ、またアレクサンドロス大王の世界制覇を支えた思想でもある。そして、キリスト教の浸透も、神の下では人類は皆平等だという考えが広まったことであり、根底にはこのコスモポリタニズムという理念があるとも言われる。近世になって、コスモポリタニズムについてはカントがその代表的論者となった。しかし、これはインターナショナリズムとは違う概念である。そちらはそれぞれの国家という存在を前提としているのだが、コスモポリタニズムは大規模な世界を総じて一つとして捉えており、そのため抽象的だと指摘されることもある。

本書のまえがきで、著者はヘンリー・メイヒューとヘンリー・ジェームズの見解を紹介している。ヘンリー・メイヒューによる論文において、ロンドンとはもはや都市ではなくて世界である。つまり、ロンドンを見たら世界が見えるという考えである。それくらい当時ロンドンは人口も多く、階層、人種、国籍、職業、など人々の多様性も豊かで、いわば世界の縮図であったのだ。また、ヘンリー・ジェームズもロンドンの *representativeness* を強調している。彼にとって、ロンドンは知恵の宝庫であり、物質的にも精神的にも地球全体を包括する場であったのだ。ここで私は、「ロンドンに飽きた者は人生に飽きた者だ。ロンドンには人生が与え得るもの全てがあるから」というジョンソン博士の言葉を思い出した。

また、このようなグローバル性を持つロンドンという都市のイメージには、ポジティブな見方とネガティブな見方の両方があったという事も著者は指摘する。例えば、カントは恒久的な平和への道として楽観的な考えを示したのに対し、マルクスはブルジョワによる市場の搾取を懸念し、悲観的であったというのだ。

ただ、アーバン・コスモポリタニズムとは、ヴィクトリア朝文学というよりはもともとモダニズム運動と関連付けられて語られるものである。しかしそこで、著者はあえてヴィクトリア朝の文学における都市と世界の有機的なつながりを語る。そして、このような全世界への作家たちの意識こそ、ヴィクトリア朝のリアリズムを理解する上で欠かせないと述べているのである。

序論では、全体の概要を述べることに加え、なぜコスモポリタニズムに著者が焦点を置いたのか、また、ヴィクトリア時代にまでコスモポリタニズムについて遡ることがどう有意義なのかが説明される。著者曰く、*transnational*, *geopolitical*, *global*, *postcolonial* などよりも *cosmopolitanism* という用語の方がヴィクトリア朝の文章には汎用されており、それはグローバリゼーションに対するヴィクトリア

朝の人々の複雑な態度への糸口となっているというのだ。コスモポリタニズムを語る際、それにはカント的な用法も色濃くあった一方で、今で言うグローバリゼーションの代わりとしてあったのだという考え方もあり、1851年のロンドン万博開催を契機にコスモポリタニズム＝グローバリゼーションという考えが強化されたと言う。また、コスモポリタニズムの変容や変遷についても触れられている。

筆者がコスモポリタニズムに魅了される理由の一つは、そのパラドックスにある。つまり、コスモポリタニズムを語る上で世界覇権を握ったイギリスの文学に焦点を置く必然性はあるのだが、しかし、独特のイギリスらしさなどはどこにあるのか明瞭でない。例えば、『ユートピアだより』（原題は“News from Nowhere”）の作者ウィリアム・モリスも、イギリスではなくどこでもない“nowhere”を志向した。アメリカ生まれのヘンリー・ジェームズも、ポーランド生まれのジョセフ・コンラッドも、イギリスという国のインサイダーでもアウトサイダーでもあると言える。ウルフも、「ひとりの女として、私には国がない。ひとりの女として、私の国は全世界だ」と述べている。このようなコスモポリタニズムは、イギリス独自のアイデンティティを薄れさせる働きもしたが、普遍性という高い地位を与えるという作用もあったと言えるのだ。また、著者はこれを、グローバリゼーションとナショナリズムの弁証的な概念として扱っている。コスモポリタニズムとナショナリズムは反対的に捉えられがちだが、実は共存関係にあるのだと彼女は述べているのだ。

本論は二部から構成されている。第一部は第一章と第二章までで、「コスモポリタン・リアリズムの派生」（“Emergence of Cosmopolitan Realism”）という題が付けられている。1851年の万博や世界都市として奉られるロンドンの姿を軸として19世紀中期頃を範囲としている。第二部は第三章から第五章までで、「世紀末とその先におけるコスモポリタン・リアリズム」（“Cosmopolitan Realism at the ‘Fin de Siècle’ and Beyond”）である。19世紀末という、文学でのコスモポリタニズムの本格的な開花や、文学やジャーナリズムなど執筆活動の激化が見られた時代を扱っている。

第一章は、コスモポリタニズムという広い言葉の定義、ロンドン万博の意義、そして中流階級向けの雑誌「コスモポリス」（1896～1898）の考察が中心となっている。世界初の万博はロンドンのハイドパークで1851年5月1日より10月15日まで開催され、大成功をおさめた。ここで、都市内に全ての国家の人々が存在すると言われたロンドンが世界の代表たる場として選ばれた象徴性、全ての国家の展示が集中するトポスとしての妥当さが指摘される。そして、ヘンリー・コールによるスピーチ、サッカーによる華麗な詩や、マーティン・タッパーによる

賛辞の詩などを引用し、当時の風刺画や誌面を加えながら、いかに万博が文学や執筆の題材となったかが示される。それは作者たちの観点を表すものとなっており、特にサッカーとタッパーのものはどちらも、ロンドン heavenly city だという考えが反映されている。

雑誌「コスモポリス」は多言語主義で、世界に向けての配信を試みた。英語とイギリスを中心とはするものの、フランス語、ドイツ語での出版、そしてヨーロッパ各地にて拠点を置いた。この雑誌はコスモポリタニズムへの肯定的な姿勢を示したものであったのだ。

第二章は、ワーズワースの『序曲』(1850年)の考察が中心となっている。ここで著者は、ヴィクトリア朝文学における都市の描写にはスケッチとパノラマという二種類があり、前者が断片的、後者が全体的なもので、この二つがあることでポリスとコスモスの往来が果たされており、ローカルとグローバルな視点の双方を可能にしていると述べる。

『序曲』においてワーズワースは sublime を提唱している。彼は unity of man や love for humanity を勧め、都市にユートピアとしてのポテンシャルを強く見出している。また、center over periphery や aesthetic over politics を懸念して嫌がる批評家がいる中、著者自身はコスモポリタンな美徳、つまり人権や人類は皆兄弟であるという考えの主張のために、コスモポリタニズムは必要なことであると書いている。

また、この章ではディケンズについても触れられている。彼の『荒涼館』では、暗く描写される都市へのネガティブな見方が顕著である。例えば、スキムボールのようなコスモポリタンは忠誠心や付属意識に欠けた根無し草として揶揄されており、national degeneration への作家の不安が伺われる。しかし、ディケンズは完全なアンチ・コスモポリタニズム派であるとは必ずしも言い切れず、そこにはまだ曖昧さが残っている。悪い面を取り上げてはいるのだが、良いものとなりうる可能性や、世界の有意義な有機的結合への期待も否めないという著者は述べている。

第三章は、ドイルの『緋色の研究』とヘンリー・ジェームズの『カサマシマ公爵夫人』を扱う。彼らの作品はスタイルが異なるが、ともにコスモポリタニズムが鍵となっている。まず、シャーロック・ホームズはコスモポリタンである。Holmes の発音が Homes と同じなのは偶然ではないとまで著者は指摘している。つまり、彼にとって世界中ならどこでもが domestic sphere なのだということだ。ホームズは、人間は皆似通ったものであると考えており、だからこそ推理すべき話を聞くだけで真実が言い当てられてしまうのだ。また、ドイルはホームズを蜘蛛に見立て、周辺のネットワークに網のイメージを当てる。まさにインターネットというウェブのイメージに近いと感じた。そして、ジェームズの作品でも、主

人公のヒヤシンス・ロビンソンはコスモポリタンである。彼もまた身の回りの謎を解き明かすために世界的な視点を持つ必要がある人物である。また、ジェームズはロンドンを、世界の人々が集結する場として、美意識をもって描いている。

第四章は社会主義的インターナショナリズムとリアリストのユートピアについての考察で、新たな形のコスモポリタン・リアリズムを示している。ここでは、ウィリアム・ブースの『最暗黒の英国とその出路』とウィリアム・モリスの『ユートピアだより』、そしてロンドンを題材としたカリカチュアやアレゴリーなどが議論される。ロンドンが拡大し地球全体にこぼれていく風刺画がとても印象的であった。モリスとブースの書くスタイルは違って見えるのだが、共通点がある。両者とも、ロンドンを労働者たちが築きあげる新たなエルサレムとしてのユートピアのイメージを託しているのだ。

第五章では 20 世紀の話に入る。グローバルな資本主義や世界規模の政治権力や世界規模の危機感 (sense of calamity) などが高揚する中で統合意識が強まり、都市の描かれ方もそれに対応していく。この章では、コンラッドの『シークレット・エージェント』とウルフの『ダロウェイ夫人』が論じられる。両方の作者に共通点はロンドンという舞台だけではなく、一種の疎外感 (a sense of alienation) のようなものも共有している。ただ、ウルフの方がより楽観的で、ユートピアの復元が達成されていると著者は言う。

結論では、ヴィクトリア時代のコスモポリタニズムの遺産としてのロンドン・アイヤシティ・シネマが話題にあげられる。そして、1994 年に発表されたパトリック・キラーの『ロンドン』やスティーブン・フリーアによる 2002 年の『ダーティ・プリティ・シングス』など、最近の映画作品も議論される。

本書を読んで全体的に感じたのは、社会・歴史・文学・思想を融合して考える事の楽しさだった。古い文学作品に親しんでタイムスリップするような感覚を味わうばかりでなく、世界史や他分野で学んだ事も活かし、社会や歴史的背景も合わせて文学を考えるのが自分は好きだという事を改めて認識した。また、本書を読むことは最近大学の授業においても議論されたグローバル化という現象を再考する契機にもなった。このように学び楽しめた一方で、正直難解で何度も読み直した部分もあり、知らない作家や作品もかなり多く、研究書を十分に読むには自分はまだまだ努力不足だと痛感した。大学に入って初めてのこの長い夏休みを機会に、精力的に読書に励み、成長したいと切実に思った。